

## ヴェルノン事件

——パリから見た地方——

早 川 理 穂

はじめに

アンシャン＝レジム期の食糧供給に関しては、政府は常にパリへの供給を最優先してきたが、その立場は革命期においても一貫していた。こうしたパリ優遇政策は、特に食糧不足の時には当然のことながら他の地域の反感を買うことになるが、パリと地方の意識の差はどのようなであったのか。本稿では一七八九年にヴェルノンVernonで起きた市政革命と穀物商人襲撃事件を採り上げ、この事件に対する憲法制定議会Assemblée nationale constituanteとパリ市の反応を考察していきたい。その際、まずはじめに断っておかなければならないことは、今回参照した史料の中には県文書館史料は含まれていないということである。ヴェルノン側の史料について

は、恐らくエヴルーEvreuxにある県文書館に多く保存されていると推測されるが、その種類や量についてはまだ調査が済んでいない。ここではパリの国立古文書館に保存されている手稿史料（憲法制定議会やパリ市に対して送られてきた報告書や手紙、議会議事録<sup>(1)</sup>）とフランス国立図書館所蔵の印刷史料のうち、パンフレット、議会議事録、同時代の新聞を主に参照した。<sup>(2)</sup>そのためヴェルノン市民の意見は、最終的にパリに送られた文書によって知るのみで、途中の経過については分からない面も出てくるであろう。しかし、これはパリにいた議員たちが入手し得た情報に基づいて分析するということを意味する。

なお、事件の概要について知ることのできる研究については、あまり多くはない。<sup>(3)</sup>

## 一 ヴェルノン市政革命<sup>(4)</sup>

ヴェルノンは、ノルマンディー地方にあるウール県（県庁所在地はエヴルー Evreux）の一都市で、パリの西八十キロメートルほどのところに位置する、セーヌ河左岸の町である。エヴルーからは三十二キロメートル、ルーアンからは五十六キロメートルほどの距離にあり、パンティエーヴル PANTHIEVRE 公爵<sup>(5)</sup>が領主であった。

一七八九年の時点では市長と二人の市参事官が統治を行っていたが、市長は数年前からヴェルノンには住んでおらず、実質的には二人の市参事官が交代で市長の代わりを務めていた。そのうちの一人がテュヴァッシュ TUVACHE であった。公爵の尽力により、一七八九年初頭の厳しい冬の食糧不足時にも悲惨なことにはならずに済んだ町も、全国三部会の選挙が終わった四月以降動揺が起った。選挙によらず、公の指名によって選ばれた市参事官たち（テュヴァッシュとボーデ BAUDET）に対し、多くの市民が合法的ではないとして異議を申し立てたのである。こうした中、七月十四日以降パリで市政革命が進められたのに倣い、ヴェルノンでも市当局と、従来からあったブルジョワ民兵を刷新する動きが見られた。八月一二日の市総会ではそうした動きに反対し、秩序回復を訴える憲法制定議会への嘆願書が作成された。<sup>(6)</sup>この嘆願書では、ヴェルノンがパリとヴェルサイユの穀物供給地であることに触れており、中央にとってヴェルノンが食糧政策上重要である点をアピールしている。

### ヴェルノン事件

人々から快く思われていなかった市参事官たちは市政の変革を恐れたが、結局十六人からなる委員会が創設され、多様化する市の業務を補佐することになった。市側は選ばれた委員たちのうちの何人かに難色を示し、また選挙の合法性に疑問があるとして、委員会を招集しなかった。

これに対して職人や中間層の住民は市の役人のうち、自分たちの支持する二名を市のトップに据えるよう要求した。更には新たな委員会を創設しようとして教会で集会を開き、臨時委員会 *comité provisoire* を設立することを決めた。臨時委員会は十六人の委員に四人の選挙人を加えることとし、委員長には市長の資格を与えるものとした。最終的に選挙によって委員たちが選ばれ、「市長」にはヴェルノンにあるバイイ裁判所代理官 *lieutenant* 兼主席検事 *procureur du Roi* であるリロー RIGAUT が選ばれた。本稿では、この先従来の市政を旧市政、臨時委員会を新市政と呼ぶことにする。新市政は市庁舎を占拠し、旧市政はテュヴァッシュを中心としてバイイ裁判所法廷で、新市政は市庁舎でそれぞれ総会を開くという状態が続いた。新市政は多くの住民によって支持されていたが、旧市政の支持者は少数であった。旧市政側は新市政側に和解を申し入れるが、受け入れられなかった。

その一方で従来から存在したブルジョワ民兵の刷新もはかられた。四百〜五百人からなるブルジョワ民兵が組織され、選挙により名誉将軍にパンティエーヴル公、その代理にデガ DESGATS、副司令

官にド・モルダンが選ばれた。<sup>(8)</sup>しかしデガは旧市政に取り込まれ、市庁舎でそのポストに就くための宣誓を行うこと及び新市政を承認することを拒んだ。デガのポストにはヴィレ VILLERS 侯爵が指名された。そしてデガはといえば、旧市政側の人々と共に密かに会合を開き、新市政に代わる十六人からなる常設諮問会議 conseil permanent の設立を提案した。<sup>(9)</sup>

この新旧市政の分裂状態を巡っては、両者とも憲法制定議会に相手を排除するよう求めている。新旧市政に対する議会の反応については後で触れることとし、先に一七八九年一〇月二七日のプランテ襲撃事件を見ていく。

## 二 プランテ襲撃事件<sup>(10)</sup>

ジャン＝ミシェル・プランテ PLANTER は、多大な投資をして二十年前に彼自身がヴェルノンに設立した事業所を所有していた。彼の熱意をたびたび目にしていた政府は、一七八八年一二月に彼をパリへ呼び、首都の食糧供給のため外国から輸入した小麦を、できるだけ速く、安く小麦粉にするよう要請した。プランテがこの仕事を引き受けるためには、彼の通常の業務を犠牲にしなければならず、しかも非常に困難で危険を伴う仕事ではあったが、人々が自分を必要としてくれているのなら、ということ引き受けた。彼はこの立場を自分の利益のために利用したりするようなことはなく、手始め

に店にあった小麦粉を、安い価格で政府に納めた。

一二月九日、彼は政府と次のような契約に合意した。すなわち、一七八九年一月一日から六月三〇日までの間、ルーアンで受け取った小麦粉をヴェルノンに運び、そこで製粉する、というものである。彼はヴェルノン周辺でできるだけ多くの製粉所を確保し、ヴェルノン及びその近隣のマント Mantes、ムーラン Meulan に倉庫を建てた。しかし彼は、地元の人々の負担を軽減するため、三等粉を製粉し、製粉所周辺地域で売る権限をも周到に得ていた。またムーランの倉庫で扱う分は、パリの委員に関わらせることなく自分のものとしていた。プランテはその手腕により政府に余分な出費をさせることなく、十ヶ月間——食糧不足の時であったため、契約期間が延長された——すなわち一〇月三十一日までに、六九二三五〇カンタル分の小麦を製粉した。<sup>(11)</sup>しかも、契約は更に一七九〇年五月三十一日まで延長された。

プランテは善良な市民たちの信頼を勝ち得ており、「貧窮者は彼の中に父親の姿を見出していた」<sup>(12)</sup>。彼は一七八八年の厳しい冬の間も地元の小麦粉供給に従事し、そのためヴェルノンは近隣の町よりパン価格を低く抑えることができた。また、近隣の地域にも供給を行っていた。しかし、ヴェルノン以外の地域から小麦粉を求める人々が多くなったため、もともと余るほどあったわけではなかった小麦粉は、全員に行き渡るわけもなかった。しかもパリへの食糧供給は必要性に迫られていた。<sup>(13)</sup>

そのプランテがヴェルノンの住民によって襲われたのは、一七八九年一〇月二七日のことであった。その二日前、ヴェルノンではパンが絶対的に不足していたが、人々は彼のところには小麦粉が豊富にあると思っていた。前述のようにプランテは危機の冬でも地元への食糧供給を続けていたのであり、もしそれが中断されたとすれば、パリの供給に従事していたからであるという。<sup>(14)</sup>人々はプランテを襲い、彼を吊し首にしようとしたが、二度試みて二度とも綱が切れたために失敗した。前述のリゴアの息子が救助に向かったが、一人のイギリス人青年がプランテ救出に貢献した。<sup>(16)</sup>プランテは重傷を負い、後に障害が残ることにはなったが一命はとりとめ、ルーアンに逃れた。<sup>(17)</sup>

ここで明らかなのは、少なくとも政府や市当局者からは、プランテは買い占めなどとは無縁な善良な穀物商人であり、彼らの目から見ればヴェルノン住民の信頼も得ていたと映っていたことである。事実彼は、ヴェルノンや近郊の地域の穀物供給を行っていたのであるが、一七八九年一〇月の段階で、彼の手には負えないほど多くの人々が穀物を求めてヴェルノン内外から集まって来たのであり、こうした危機の際、彼が契約を果たすべく、パリへの供給を優先したらしいことである。パリ市から派遣された委員たちは、このような事件が起こった直後の一〇月二九日・三一日に、プランテの扱う小麦粉をパリへ送り出そうと腐心しており、<sup>(18)</sup>パリ市にとっての食糧供給の重要性が分かる。しかし、プランテのような商人にとっては当

たり前の、契約を守るということが、食糧不足時に地域外に出発する小麦粉運搬車という光景となって現れば、人々の怒りをかき立てるのには十分であつたろう。<sup>(19)</sup>

### 三 パリ市と憲法制定議会の対応

一七八九年七月一四日のバステュー襲撃以降、議会では封建的諸特権の廃止や人と市民の権利の宣言（人権宣言）など矢継ぎ早に重要な問題が決められていたが、ヴェルノン事件と密接な関係があるのは、国内の秩序回復に関する法律と、穀物取引の自由に関する法律である。八月五日には、平穩の回復、とりわけ穀物取引の自由の回復のためのデクレが制定されているが、それはこの時期国内各地で穀物運搬車が止められて掠奪が行われ、穀物の自由取引が妨げられていたためである。一〇日には、秩序と平穩の回復について、さらに詳しいデクレが制定されている。穀物取引の自由については八月二九日に<sup>(22)</sup>デクレが制定され、九月一八日に再確認されているが、いずれも国内における穀物取引の自由と国外への輸出を禁止する、という内容である。この二つのデクレは、一〇月五日<sup>(24)</sup>——パリの市場の女性たちがパンを求めてヴェルサイユ行進を行い、翌六日に国王一家をパリへ連れ帰った「十月事件」が起こった——に、改めて確認され、それと同時に更にパリ周辺の市町村に対し、パリにパンを運ばせるよう求めている。穀物取引の自由は、議会で主導権を握っ

ていたブルジョワの望むものであったが、それは伝統的な統制経済を望む民衆との間で常に争点となる問題であった。

穀物取引の自由については遅塚忠躬氏が指摘しているように、「憲法制定議会においては、穀物輸出の禁止と国内における穀物取引の完全な自由とが、農業をはじめとする国民経済全体を発展させる鍵であり、かつ、食糧問題を解決する最良の手段でもある、と考えていた<sup>(25)</sup>」のであり、九一年体制で堅持されることになる。

ところで九月二十四日、憲法制定議会においてヴェルノンの分裂状態について報告がなされているが、新旧市政の対立、新しいブルジョワ民兵創設と共に、新市政の行動について語られている。それによれば、立法・司法・執行の権限を自分のものにしようとし、また、全体の利益と称する揭示を行っているというのである。この揭示は全ての自作農民 *laboureur* は市庁舎へ行き、町に供しうる穀物の量を申告すること、それを怠った者は買い占め人と宣告されること、穀物を自宅で売ったり、外国へ売ったり、地域外で売ったりした者も買い占め人と宣告されること等が記されているという。それに対し憲法制定議会は、八月一〇日のデクレ、八月二十九日・九月一八日の穀物の自由取引に関するデクレを重視する様子を示している。<sup>(26)</sup> すなわち、新市政の政策は、穀物取引の完全な自由に抵触する部分があるというのである。

一方、パリの委員会（パリ市の食糧委員会を指すと思われる）は、パリでは市政の変革が行われたが、パリは他のどの都市とも状況が

異なっており、パリの例は他の都市にとっての規範にはなり得ないとし、ヴェルノンの新市政樹立の動きを驚きと不安をもって受け止め、秩序維持が重要だと述べている。<sup>(27)</sup> しかし憲法制定議会とパリ市がヴェルノンに積極的に介入するのは、一〇月二七日にプランテ襲撃事件が起こったためである。

パリ市は、二八日に事件についての報を聞くと、プティールゾーギュスタン・ディストリクト *district des Petits Augustins* 大隊長である *DIERES* を司令官としたパリ国民衛兵をヴェルノンに派遣することを決定した。<sup>(28)</sup> そして翌二八日<sup>(29)</sup>にパリ市長バイイが憲法制定議会で事件についての報告を行い、動揺を鎮めるため、またプランテを救出するため、議会がヴェルノンに手紙を送るよう求めている。それと共に、重要なのはあらゆる食糧供給に及ぶ暴動を抑えるために罰を課すことである、と述べている。議会では二九日<sup>(30)</sup>に、パリ市の派遣したパリ国民衛兵とは別に、国王がヴェルノンに軍隊を派遣したことを伝え、また、食糧供給に関するデクレと戒厳令に関するデクレを送ったことも明らかにしている。一方ヴェルノン側は、プランテに対する暴力を容認しないこと、パリの国民衛兵の助けを要求すること、秩序回復を約束すること、パリに向けて小麦粉を送ったことを伝えてきている。

パリ市から派遣されたディエールは戒厳令を発令したが、この戒厳令は、十月事件や一〇月二一日にパリで起こったパン屋殺害事件に対する危機感から、一〇月二一日に制定されたものである。その

審議過程で少数派である戒厳令反対派の一人、ロベスピエールは、食糧暴動を戒厳令の適用の対象とすることに異議を唱えた。<sup>(31)</sup>食糧を求めて集まって来ている民衆に対して武力で応じることに反対である、とする主張である。しかし、ヴェルノンで起きたプランテ襲撃事件は明らかに食糧暴動であり、それに対して戒厳令が適用されているということは、もともと戒厳令制定のための主な理由が食糧暴動であり、それを戒厳令の適用対象外とすることは論外であるという<sup>(32)</sup>ことを改めて示したものであった。

ディエールは、暴動を鎮圧し、旧市政を回復させ、二七日の事件の首謀者として五人が拘束された。<sup>(33)</sup>これによりヴェルノンでの事件は収まったかのように見える。しかし旧市政を回復させた後も、新旧市政対立の火種はくすぶっていた。新市政側の人々は、臨時委員会を解散させたディエールの措置は議会から与えられた権限からの逸脱であり、不当である、という訴えを行っている。<sup>(34)</sup>他方、旧市政陣営は、そうした非難は妥当ではなく、ディエールの手腕を評価する、と述べている。<sup>(35)</sup>パリ市は、ディエール派遣に際して旧市政を回復させることを初めから意図しており、<sup>(36)</sup>旧市政の立場を支持していたと見るべきであろう。しかしこの対立関係は、いましばらく続くことになるのである。

## 結 論

### ヴェルノン事件

パリ市は、一七八九年七月一日以降進んだ市政革命に関し、パリは特殊な状況に置かれており、それは他の都市の規範とはならない、とし、ヴェルノンで起こった新市政樹立の動きに対して反対する立場をとっている。ジョルジュ・ルフェーヴルが指摘するように、パリの影響を受けて各地で市政革命が行われたが、パリ市はそれに対し、ヴェルノンの例を見る限りにおいて、必ずしも賛同してはいなかった。一方パリの革命の影響は民兵の再編成にも及び、ヴェルノンでも民兵刷新の動きが見られた。

しかし、新旧市政の対立が引き起こしたヴェルノンの混乱について、パリ市と憲法制定議会は、すぐに武力派遣で介入することはなかった。それが行われたのは、一〇月二七日、パリの穀物供給を請け負っていたパンテール襲撃事件が起こったためである。権力の空白状態にあったヴェルノンは、自力で治安を回復することができなかったためであるが、パリの国民衛兵派遣は、暴動の鎮圧のみならず、新市政の解体と旧市政の回復までも行ったのであった。この「行きすぎた」措置に対してヴェルノンの新市政に賛同する人々からは、「革命性のゆえに排除される」との不満が述べられている。しかしその背後に見られるのは、パリ市にとって最優先事項は食糧供給問題であり、ヴェルノン市は食糧供給地として重要である、という観点である。一方憲法制定議会にとっては、全国の秩序維持が課題であったが、それは特に穀物取引の自由を守るためであった。そのため、議会には、ヴェルノンのプランテ襲撃事件はなによりも

まず、穀物取引の自由に違反するものとして受け止められたのであった。

# 註

- (1) ヴェルノン事件に関する国立古文書館所蔵の手稿史料の一覧については以下を参照。Alexandre TUETÉY, *Répertoire général des sources manuscrites de l'histoire de Paris pendant la Révolution française*, 11vol., Paris, Imprimerie Nouvelle, 1890, tome I, pp.357-358. 444' の本を Archives Nationales (以下 A.N.と略記) D/XXIX/92と紹介されているが、現在では D/XXIX/81に分類されている。

- (2) 主筆のこのことは Maurice TOURNÉUX, *Bibliographie de l'histoire de Paris pendant la Révolution française*, 5 vol., Paris, Imprimerie Nouvelle, 1890, tome II, pp.61-63参照。

- (3) L. BOIVIN-CHAMPEAUX, *Notices historiques sur la Révolution dans le département de l'Eure, Eureux*, Imprimerie d'Auguste Hérissey, 1868, Chapitre IV (Troubles à Vernon). ただし参照史料はこのことは記されていない。Théodore MICHEL, *Vernon et ses environs*, Paris, Res Universis, 1990 (réédition de *Histoire de la ville et du canton de Vernon*) paru en 1851). これも参照史料には記及がなく、事件の記述については交錯性を欠いている。René ROUAULT DE LA VIGNE, *Les débuts des troubles de Vernon en 1789*, Actes du quatre-vingt-unième congrès national des Sociétés Savantes, 1956. 地方都市当局と食糧供給をめぐる問題に関して、ルーアンとダンケルクの興味深い事例として以下の論文がある。高橋暁生「フランス革命地方都市の政治的態度と地域的背景—ルーアンの穀物供給問題—」『社会経済史学』六八—二〇〇二年、六五—八六頁。佐藤真紀「一七九二年初頭のダンケルク市食糧暴動にみる地方ブルジョワ階

の権力」『史学雑誌』一〇七—一九九八年、四二—六五頁。

- (4) 全体として L. BOIVIN-CHAMPEAUX, *op.cit.*, A.N. C272, Mémoire sur la municipalité de Vernon, le 8 septembre 1789 (Bibliothèque nationale [以下 B.N.と略記] Lk7 10173は同文を収め)、A.N. D/XXIX/bis/2, Comité des recherches, le 30 octobre. ベリシのメンペー、ベリシマン GRANDIN' マン— ROUSSEAU のベリシ市宛手紙 (Sigismond LACROIX, *Actes de la Commune de Paris pendant la Révolution*, Paris, Maison Quantin, 1894, tome II, pp. 461-462) の掲載になっている。同時代の未発表書簡に基づいて René ROUAULT DE LA VIGNE, *Les Débuts des troubles de Vernon en 1789*, *Actes du quatre-vingt-unième congrès national des sociétés savantes Rouen-Caen*, Paris, Imprimerie nationale Presses universitaires de France, 1956を参照。

- (5) トゥールーズ伯の息子として生まれたパンティエール公は、フランス海軍元帥であった。公爵の息子は若くして亡くなったが、その妻ランベール LAMBALLE 公妃は最後までベリ—マンとフネットに忠誠を告げ、一七九二年九月にベリの民衆により虐殺されたことば知られている。また、公爵の娘はオルレアンの ORLEANS 公フィリップ・エガリテ Philippe Egalité の妃であった。

- (6) A.N. D/XXIX/81 Suppliant très humblement le corps municipal, les électeurs et les citoyens de tous les ordres de la ville de Vernon le 12 août 1789. A.N. D/XXIX/81, Addition au mémoire et à la requête présentée à nosseigneurs les Etats Généraux par le corps municipal, les électeurs, la majeure et la plus saine partie de citoyens de tous les ordres de la ville de Vernon, le 16 août 1789. においても同様の主張がなされている。

- (7) 市庁舎に入る際、新市政側は混乱もなく整然と行われた、と述べている (前掲 A.N. C272, Mémoire de Vernon, le 8 septembre 1789. この文書は新市政側の人々によって書かれたもので、ド・モルダン DE MORDANT「市長」リゴーの息子である弁護士のリゴ—ド・

ロシュフォール RIGAUDT DE ROCHEFORT の署名がある<sup>(8)</sup>。旧市政側は武装した人々に追いつかれたと述べている (A.N.D/XXIX/81 Addition, le 16 août 1789)。

(8) A.N. C272, Mémoire de Vernon, le 8 septembre 1789.

(9) *Idem*.

(10) 事件以前のプランテの具体的な仕事ぶりに関しては、A.N. D/XXIX/bis/33 Comité de recherches, Très humble pétition que présente à l'Assemblée Nationale Jean Michel PLANTER, ancien négociant à Rouen, le 31 mars 1791<sup>参照</sup>。この文書にはプランテの署名はあるが、「プランテ氏は」と三人称で書かれている。

(11) 「カンタル＝百リール (約四十九キロ)」。パリ市長バイ BAILLY の発言にある「ペリで一日に消費される小麦粉は二千袋 (一袋は三三三リール)」。リール＝四八九・五グラム<sup>1)</sup>、という数字が正しいとする。一日の消費量の約二十パーセントをプランテが供給していた計算になる。バイの発言については S. LACROIX, *op.cit.*, tome I, p.282.

(12) A.N. D/XXIXbis/2 Extrait des registres des délibérations du Conseil Municipal de la ville de Vernon en date du 4 novembre 1789. B.N. Lb39 2574 Extrait des délibérations du conseil municipal de la ville de Vernon, le 4 novembre 1789<sup>2)</sup> 同内容。後で触れるが、襲撃事件後のウェルノン市政は、旧市政の人々が中心であった。この史料の中では、臨時委員会の者はプランテ氏を中傷している<sup>3)</sup>と記されているが、今までのところ特にそのような発言は見当たらない。

(13) B.N. Lb39 2574 Extrait des délibérations... le 4 novembre 1789.

(14) B.N. Lb39 2694 Motifs de la dénonciation faite contre M. Dières, par 105 habitants de la ville de Vernon, p.25.

(15) B.N. Lb39 2574 Lettre et arrêtés relatifs à l'assassinat de M. PLANTER, négociant à Vernonet & la mission de MM.

## ウェルノン事件

ROUSSEAU & GRANDIN, représentants de la commune de Paris, députés à Vernon, le 31 octobre 1789.

(16) 一七九〇年一月十三日・十五日のペリ市役、このイギリス人青年 (C. J. W. NESHAM) のプランテ殺害について勇敢な行為を称えている<sup>4)</sup>。S. LACROIX, *op.cit.*, tome III, pp.441-443, pp.459-460.

(17) A.N. D/XXIX/bis/33 Comité de recherches, Très humble pétition... le 31 mars 1791.

(18) A.N. D/XXIX/bis/2 Dossier 17, le 2 novembre 1789, ハンター・プランテンのペリ市宛手紙<sup>5)</sup>。

(19) 伝統的モラル・エコノミーの観念に基づく民衆の行動については E.P. THOMPSON, *The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century, Past and Present*, No.50, 1971.

(20) *Réimpression de l'ancien Moniteur*, tome I, p.280. *Archives Parlementaires* (以下 A.P. と略記), tome VIII, p.351.

(21) *Moniteur*, tome I, pp.322-324. A.P., tome VIII, pp.376-379.

(22) *Moniteur*, tome I, p.398.

(23) *Moniteur*, tome II, p.493. A.P., tome IX, p.31.

(24) *Moniteur*, tome I, p.290. A.P., tome IX, p.347.

(25) 塚本忠躬『ロバート・マクルーザンとマシー・フランクスの世界的地位』東京大学出版会、一九八六年、五一頁<sup>6)</sup>。

(26) A.N. C32 272, A.P., tome IX, p.139. 後者は八月一〇日のデクレについてのものである<sup>7)</sup>。

(27) A.N. D/XXIX/81 Comité des rapports, Extrait de lettre du comité de Paris en date du 12 août 1789 adressée à M. RIGAUDT, député du comité des Subsistances de Paris à Vernon.

(28) S. LACROIX, *op.cit.*, tome II, pp.451-456. マシー・クラークは行政官であるが、ペリは六〇のマシー・クラークに分けられていた。また、このマシー・クラークを中心として七月十三日以降、ペリで民兵の編成が進められた<sup>8)</sup>。



- (63) A.P., tome IX, p.597.
- (66) A.P., tome IX, p.600.
- (16) A.P., tome IX, p.474.
- (32) フロランヌ・コーナヤエ氏は、一七九三年六月二三日に廃止されるまでの間、戒厳令が食糧暴動に適用されたことは「経済の自由にもテラール」が言っている。Florence GAUTHIER, *Liberté économique et loi martiale (1789-été 1793), L'Etat de la France pendant la Révolution 1789-1799*, Paris, Edition la Decouverte, 1988, p.233.
- (68) A.N. D/XXIX/bis/31BIS Comité des recherches, le 27 septembre 1790.
- (76) B.N. Lb39 2694 Motifs de la dénonciation faite contre M. DIERES, par 105 habitants de la ville de Vernon, [s.l.], 1789, B.N. Lk7 10175 Repliques des députés de 105 habitants de Vernon, aux Mémoires de M. DIERRES (sic), et de la municipalité actuelle de cette ville, Paris, Imprimerie de L. M. CELLOT, 1790.
- (96) B.N. Lb39 8304 Pièces justificatives de M. DIERES dans l'affaire de Vernon, Paris, Imprimerie Vue Desaint, [s.d.]. ただし各文書には、一部を除き日付が記されており、それは一七八九年一〇月から一七九〇年一月に渡っている。
- (98) S. LACROIX, *op.cit.*, tome II, pp.454-455.

※本研究は、一九九八年度早稲田大学特定課題研究助成費による。